

■ 2024年度 入試問題分析シート ■

早稲田大学

法学部

科目

国語(古文)

総括

試験時間	90分	満点(配点)	50点	出題数	現代文2題、古文1題、漢文1題			
				難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化	
				分量(昨年比)	増加	昨年並	減少	

<総論>

江戸時代の仮名草子からの出題。昨年と同様、今年も漢文が大問として独立した出題となった。本文の字数は1400字程度で、昨年の1200字程度から増加。本文中に和歌が含まれず空欄が1つであった昨年と異なり、今年には和歌が1首含まれ、空欄は3つであった。設問数は7、解答数は7で、設問数は昨年と同じだが、解答数は2つ減少した。昨年と同様、今年も記述の出題はなかった。設問のレベルは例年通りで、文法問題が出題されなかった昨年とは異なり、係り結びの問題が出題された。設問は例年通り、内容の読解を中心としたものだった。

<合格への学習対策>

文章全体の展開を把握しながら、内容を正確に読み取る力を身につけることが必要である。そのためには、文法や語句の知識も単なる暗記ではなく、前後の文脈に即して意味内容を考えていく訓練を積み重ねることが大切である。文法問題では助詞・助動詞はもちろん、敬語に関する出題も多いので、十分な対策が必要である。単語の学習は、形容詞・形容動詞に力点を置くこと。また、和歌の修辞法や解釈にも万全を期すること。文章や和歌を数多く精読する日々の訓練を怠らないことが肝要である。

問題分析(本文)

問題番号	類別(ジャンル)	出典(著者)	コメント(特徴・出題頻度など)	本文のレベル
(一)	仮名草子	『小さかづき』(山岡元隣)	今年、昨年の鎌倉時代の説話からの出題に対し、江戸時代の仮名草子からの出題で、昨年とは異なり、本文には和歌が1首含まれていた。設問は、単語の意味と本文の内容の読解に絞られていた昨年と異なり、例年通り、語句の意味、和歌の解釈、文法、内容理解など多岐にわたる出題であった。文法問題は「係り結び」に関するものであったが、文脈の理解が必要であった。	標準

■ 2024年度 入試問題分析シート ■

設問分析

問題番号	設問番号	設問形式	設問内容(特徴・解答上のポイントなど)	設問のレベル
(一)	問一	選択	空欄補充。空欄の前後は、世の常の人にとっては「足らざるを足れり」とすることは不可能だ、という意味になるところで、「無理だ・力が及ばない」という意の「及びなし」の「及び(および)」が入る。なお、ロは「あたひなし」で「価値がない」などの意味、ハは「ゆゑなし」で「理由がない・風情がない」などの意味、ニは「あひなし」で、「あいなし」と同じく「気にくわない・つまらない」などの意味、ホは「あらなし」で「無心だ」などの意味。	やや難
	問二	選択	空欄補充。「逢坂」には「逢う」が掛けられているので、「逢坂のあらしの風」が寒いということは、恋しい人に逢いたいのに逢えないということになり、歌全体は「風は寒いけれど、逢いたい人に逢えず、その寒い風に堪えてただ寝るだけだ」などの内容になる。そのようにただひたすらに堪えることが「およぼざる事をねが」ったり「かなふまじきみち」などを思ったりしないことにつながる。	やや難
	問三	選択	語句の意味。a、b、c、eは四段活用で「願いがかなう・思い通りになる」の意。dは下二段活用で「できるようにさせる・思い通りにさせる・(用事を)果たす」の意。	やや易
	問四	選択	傍線部解釈。傍線部を逐語訳すると「危険でないにちがいないやり方」。「危険でない」とは「困難に陥ることを避ける」ということである。	標準
	問五	選択	空欄補充(文法)。直前に係助詞「こそ」があるので、空欄には活用語の已然形が入る。従って正解はロ・ニ・ホに絞られる。蛙は泥亀と同じでは嫌だと言っているのだから、意味的に「心安らかでない」の意になるところで、ニかホだが、「じ」の已然形が用いられた例はほとんど見られず、意味的にも「…ないだろう」という打消推量のホよりは、「…ない」と断定的な意になるニの方が適切。	標準
	問六	選択	語句の意味。「作善(さぜん)」とは「仏教的な善行をなすこと」の意で、ここでは仏に願いをかなえてもらった際の謝礼としての善行のこと。直後に「いさごを塔とくみて仏を供養せん」とあるのを参照すればよい。	標準
	問七	選択	傍線部解釈。傍線部の内容は「(われわれ人間も)この蛙の願掛けと同じようなことがないわけでもない」ということである。蛙の願掛けとは「二足歩行をしたい」ということであり、蛙がそのような願掛けをしてそれが成就しても眼が後ろ向きになってしまったので結局昔のままの四足歩行に戻してもらった、という本文の内容を踏まえて考える。	標準

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階【難・やや難・標準・やや易・易】で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。

■ 2024年度 入試問題分析シート ■

早稲田大学

法学部

科目

国語(漢文)

総括

試験時間	90分	満点(配点)	50点	出題数	現代文2題、古文1題、漢文1題			
				難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化	
				分量(昨年比)	増加	昨年並	減少	

〈総論〉

冤罪事件について述べた明代の文章を掲げて、江戸時代の筆者が自分の考えを付け加えた文章。それぞれの筆者が、冤罪を防ぐためにどのようにすればよいと考えているかを読み取る。
旧字による出題。2022年にも旧字による出題が行われている。

〈合格への学習対策〉

句形や重要語を十分に学習するとともに、対比・対句など文脈を意識した読解の練習が必要である。漢詩が出題されることもあるので規則や読み方、また文学史を確認しておくこと。旧字による出題が行われる可能性があるため、常用漢字と旧字とで大きく字形が異なるものを確認しておくこと。また、注やふりがなが省略されることがあるため、意識して語彙力を身に付けよう。

問題分析(本文)

問題番号	類別(ジャンル)	出典(著者)	コメント(特徴・出題頻度など)	本文のレベル
(二)	漢文(随筆・論説)	聴訟彙案(津阪東陽)	失われた金瓶をめぐる冤罪事件と筆者の感想を記した江盈科『雪濤談叢』(A)を掲げ、その内容を踏まえて、冤罪を防ぐにはどうすべきかを述べた文章(B)。	標準

設問分析

問題番号	設問番号	設問形式	設問内容(特徴・解答上のポイントなど)	設問のレベル
(二)	問八	選択	書き下しの設問。句形「不勝～」、重要語「輒」に着目し、解釈も考慮して正解を導く。	標準
	問九	選択	解釈の設問。「何」はここでは「幾」の意を表す。	やや難
	問十	選択	解釈の設問。句形「不能～」に加えて、「百口」「解」の意味を文脈から導く。	標準
	問十一	選択	空欄充当の設問。選択肢の意味を考え、前後の文脈に当てはまるものを選ぶ。	やや難
	問十二	選択	全体要旨に関わる内容一致の設問。「合致しない」ものを選ぶことに注意。(A)(B)それぞれの内容に一致するものを除外してゆく。	標準

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階〔難・やや難・標準・やや易・易〕で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。

■ 2024年度 入試問題分析シート ■

早稲田大学

法学部

科目

国語(現代文)

試験時間	90分	満点(配点)	50点	出題数	現代文2題、古文1題、漢文1題			
総括				難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化	
				分量(昨年比)	増加	昨年並	減少	

〈総論〉

問題文について、(三)はコペルニクスの地動説に触発されたジョルダノ・ブルーノのコスモロジーとモラルの革新性を論じた文章であり、論理も趣旨の展開も比較的明快であり、具体性もあって、理解しやすいものだったのではないかと思う。(四)はジル・ドゥルーズにおけるノマディズムを説明するものだが、その内容や用語は抽象度が高く、論理も込み入っており、多少の前提がないと十分な理解は難しかったのではないかと思う。分量については、(三)(四)ともにおおよそ4000字程で、二問合計8000字程になり、昨年の9000字程からはかなり減っている。ただし、一昨年は7000字程、三年前までは平均8000字程であり、法学部の問題文の字数はそれくらいの揺れ幅を持っている。

設問は13問で、昨年と同じであり、法学部の通常の設定問数を維持している。記述設問の字数はここしばらく120字以上180字以内であり、本年も変わらない。漢字、空欄、傍線部説明、記述設問という問いの設定も例年通りである。(三)は、語句の空欄、傍線部説明、脱文補充、趣旨内容合致というオーソドックスな設定であり、いずれも各部分の論理や趣旨の正確な把握を確認するといったものである。(四)は例年通り、各部分の論旨を展開順序通りに問うていく形のものであり、やはり各部分の趣旨が正確に捉えられているかどうかを問うものになっている。記述問題は全体内容を踏まえて書くものとなっており、本文の内容が難解なだけに、記述要点の絞り整理には相当な読解力が必要なものとなっている。

〈合格への学習対策〉

本文と設問を論理的に読解する能力の養成に加え、文化・社会・思想に関わる様々なテーマを扱った評論問題に多く目を通しておきたい。問題文は早大の中でもレベルが高く、柔軟かつ的確な読解力が必要とされる性格のものであり、また設問も、問題文の論旨が正確に理解できているかどうかで解答の大前提になる作り方となっている。個々の設問の解法などを追う以前に、本文読解力を養う本格的な学習が必要である。本格的な記述説明への対応力も必須。記述力養成の基礎練習としては、テキストなどの問題文を180字程度で要約することが効果的であろう。

問題分析(本文)

問題番号	類別(ジャンル)	出典(著者)	コメント(特徴・出題頻度など)	本文のレベル
(三)	評論(思想)	岡本源太「コペルニクスを読む ジョルダノ・ブルーノ」(『ユリイカ 特集*コペルニクス』2023・1月号所収)	本文を趣旨展開に沿って部分に分けて読めれば、各部分の内容や論理は比較的明快であり、また、全体の構成も見取りやすく、法学部の本文としては読みやすく、入試問題文としても標準的なものである。	標準
(四)	評論(思想)	堀千晶『ドゥルーズ 思考の生態学』「第Ⅲ部 ノマドの政治 第七章 ノマドのテリトリー 第二節 存在論的ノマトロジー」	たいていの受験生にとっては、用語・論理ともに抽象度が高く、本質的に理解しようとすると途中途中で立ち止まらざるをえないような文章だったと思う。多少の前提があるとないとでは理解度にかかなりの差が生ずる。いずれにせよ、込み入った論理を手際よく整理して読む力が必要である。	難

■ 2024年度 入試問題分析シート ■

設問分析

問題番号	設問番号	設問形式	設問内容(特徴・解答上のポイントなど)	設問のレベル		
(三)	問十三	記述 (漢字)	字面を正確に書く。「頑迷」は語彙力を問うものと言える。 A・Bは第4段落及び第9段落のブルーノの宇宙論を確認する。Eは第5段落のルネサンスの哲学者たちの宇宙観を確認する。 「コスモロジー」は第7段落～第8段落の内容を確認し、「モラル」は第11段落～第13段落の内容を確認する。 第5段落の最後の一文にヒントがある。 「知」の「基盤を欠」くに対応するのは第10段落の末尾のみ。 第4段落の「生成消滅を繰り返している」という文言に着目する。 第9段落の二文目、及び、傍線部前後の論旨を確認する。 本文の内容と選択肢の細部の異同に留意する。	標準		
	問十四	選択 (語句空欄)		標準		
	問十五	選択 (部分趣旨)		標準		
	問十六	選択 (語句空欄)		標準		
	問十七	選択 (脱文補充)		やや易		
	問十八	選択 (語句空欄)		標準		
	問十九	選択 (部分趣旨)		標準		
	問二十	選択 (主旨合致)		標準		
	(四)	問二十一		選択 (部分趣旨)	第1段落～第2段落の論旨を正確に把握、確認する。	標準
		問二十二		選択 (部分趣旨)	第3段落の論旨を正確に把握、確認する。	標準
問二十三		選択 (部分趣旨)	第5段落の論旨を正確に把握、確認する。	標準		
問二十四		選択 (部分趣旨)	第6段落前半の論旨を正確に把握、確認する。	標準		
問二十五		記述 (主旨説明)	「固有性の思考」と「ノマド的思考」における「存在者」の位置づけを、それぞれ「類比のヒエラルキー」「一義性のアナーキー」というあり方に見合う形で整理する。	難		

「本文のレベル」と「設問のレベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、難易度を5段階【難・やや難・標準・やや易・易】で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。